

「座」の研究 ～八千代座レポート～

芝居小屋の現在 八千代座レポート（1）

【目次】

[施設概要](#)

- [1. 八千代座の歴史](#)
- [2. 平成の大改修](#)
- [3. 八千代座の特徴](#)
- [4. 運営](#)
- [5. 夢小蔵](#)
- [6. 訪問記（1）](#)
- [7. 訪問記（2）・まとめ](#)

【施設概要】

所在地：熊本県山鹿市大字山鹿1499
 電話：0968-44-4004
 開館時間：AM9:00～PM6:00（八千代座・夢小蔵
 共通）
 休館日：12月29日～1月1日
 料金：大人500円・小中学生250円（消費税別）
 建物規模：延べ面積1,487.4平方メートル
 収容人数：約750人
 建築年式：明治43年（1910年）
 指定：国重要文化財（昭和63年）
 ホームページ：<http://www.yachiyoza.com>



熊本県山鹿市といえば、山鹿温泉と1,000年以上の歴史を持つ「灯籠まつり」で全国に知られる観光都市である。ここには、明治の終わりに建てられ、2001年に『平成の大修復』が完了した芝居小屋、「八千代座」がある。実は、昭和40年代の閉館後、建物そのまま放置され、老朽化が進み、“お化け屋敷”とまで揶揄された。それが見事に復活したのは、住民の復興運動の結果でもある。解体を免れ、見事に復活した八千代座の全貌をレポートする。

1. 八千代座の歴史

(1) 旦那衆の“接待”の場

芝居小屋の誕生には、農民歌舞伎から出発したいわば自然発生的なパターンと、明治以降に繁栄を極めた鉱山業で働く人々のための福利厚生施設として作られたパターン（現存建築では、次回掲載予定の秋田県小坂町「康楽館」がその代表）に大別される。しかし八千代座の場合、山鹿の商工会の“旦那衆”によって発足した「八千代座組合」が設立した、今でいう“会員制クラブ”的な空間として誕生したという大きな特色がある。



山鹿の街は当時、商工業の中心的都市として栄えていた。江戸時代から付近を流れる菊池川を利用した水陸交通の要衝として、関西などとの水運が活発で、さらに県内屈指の温泉場を核とする観光地としても古くから栄えていた土地だった。明治41年に熊本県内では熊本市に次いで2番目に電話が引かれたという事実が、その繁栄を示している。

また、それ以前の江戸時代も、市内の豊前街道は参勤交代のルートとして、宿場町としても栄えていた地域でもあった。

こうしたまちのリソースにより、いわゆる『ヒト・モノ・カネ』が集まってくる

と、自ずと文化、芸能が生まれてくる。明治43年、当地の裕福な旦那衆によって「八千代座組合」により、当時最大の娯楽施設であった“座”の建設が計画されたのである。目的は、地域住民が楽しむのが第一義ではなく、お得意さんの接待の場としての役割が強かったようだ。その後昭和55年に山鹿市に寄付されるまでの70年間、変わらず八千代座組合が所有し運営・管理を行ってきたのである。

明治44年のこけら落とし公演では、松島屋一座の大歌舞伎が上演され、連日満員となる大人気ぶりであったという。その他に活動写真、浪曲、三味線の演奏会など、さまざまな催しが行われ、活況を呈していた。大正6年に芸術座によるトルストイの『復活』がかの松井須磨子により上演され、町中で劇中歌である「カチューシャの唄」が大流行したというエピソードも残っている。また、相撲やボクシングの試合も行われたといい、“一大娯楽センター”として有効に、そして活発に利用されていたことがうかがえる。



設立当時の八千代座
(八千代座公式ホームページより)

こうして、大正から昭和20年代ころまでは隆盛を極めていたのだが、30年ころになる映画の時代となる。そのため、芝居興行が下火になり、対策として八千代座に映画館機能を付与するため、映写室が取り付けられた。ところが、当時山鹿には八千代座を入れると4つの映画館があったというが、この八千代座はイスを設置せず、畳に座るままの構造が映画鑑賞においては逆に不評となり、客足が遠のいてしまったという。そして、テレビの時代になると、映画も下火になり、結局八千代座も昭和40年代には経営不振となり閉鎖の憂き目にあったというわけだ。

(2) 市民の瓦一枚運動を機に復興へ

その後、建物は朽ちるに任せていたため、昭和55年に組合から市へ寄付された年には雨漏りもひどく、人々から「お化け屋敷」と呼ばれるほどひどい状況だったという。

そのような“惨状”から見事に復興を遂げたのには、山鹿市の尽力は当然ながら、市民の復興運動が大きい。市が引き取った際、町中の一等地に建っていることもあり、解体して跡地にショッピングセンターを作ろう、といった話もあったという。それでも保存に向けて昭和60年に市は指定文化財への指定を行った。これを契機に、昭和61年に市の老人会を中心に「八千代座復興基成会」が発足、「瓦一枚運動」が始まった。これは市民から瓦一枚分の寄付を募るというもので、その募金により翌年には屋根の葺き替えが行われた。そうして昭和63年には国の重要文化財にも指定されることとなり、改築が施され、ついに平成元年には一般公開が可能となり、本来の「座」としての機能が復活したのである。

このように存続できただけでも十分にラッキーといえるのだが、もうひとつとても運の良いエピソードがある。八千代座復興を願う女性カメラマンが、建物の資料を歌舞伎役者の坂東玉三郎に送ったことがきっかけで、平成2年から「玉三郎舞踏公演」が始まったのだ。実はこの時点では、応急処理的な修理を繰り返していた程度で、大物と呼んだ本格的な公演にはまだまだ厳しい状況であった。玉三郎が下見をした際には楽屋が使えなかったり、床が抜けていたりしたそうだが、それでも地元の熱意が実を結び、公演が実現した。このことがきっかけで八千代座は「玉三郎が来る芝居小屋」として全国に名が知られるようになったのである。玉三郎公演はその後も続き、これが弾みとなって平成8年から平成の大修理が行われることになった。

そして平成13年5月に竣工し、8月には八千代座にとって二度目のこけら落とし公演が歌舞伎の片岡仁左衛門一行によって行われた。また、10月には5年半ぶりの玉三郎公演も行われている。以前は民間団体が主体となった実行委員会を組織して玉三郎公演を誘致してきたが、今公演からは主催が山鹿市、プロモーターが共同西日本という形になっている。とはいえ、前回までと同様に市民ボランティアの手により準備が進められており、地域を挙げて盛り上げていることには変わりはない。

芝居小屋の現在 八千代座レポート（2）

2. 平成の大改修

重要文化財を修復する場合、建設当初の形に戻すというのが大原則となっている。ところが八千代座は設立された明治43年の姿ではなく、大正12年当時の姿に生まれ変わっている。それには次のような理由がある。

設立当初はシンプルな形状で、江戸時代の芝居小屋とさほど変わりがなかった。その後大正9～12年頃に両脇に喫煙室が設けられた。この頃に「興行場取締規則」が改正され、人が多く集まる場所には喫煙室を設けることが義務づけられたためである。この増築によって小屋のスタイルに安定感と華やかさが加わり外観が整った。そしてその後70年間以上にわたり人々に親しまれてきた姿であるという理由から、文化庁から特別に許可が下りたのである。また、大正時代中～後期の八千代座が最も賑わっていたという歴史からも、この当時の姿に復原することがふさわしいという判断となった。

八千代座の復原で重要なのは、実際に稼働できる形で整備することだった。傷みをなおし、元の姿に戻すだけでなく、芝居ができてこそ芝居小屋である、という信念で「活きた芝居小屋」を目的として工事が進められた。そして市民には「我が街の八千代座」としてのマインドを高めるために、4年半の工事期間の間に35回もの市民見学会が行われた。その際に配布されたレジュメをまとめた資料を頂いたが、ここにはどのような形に復原されるのか、その理由、そのために考慮しなければならないこと、苦労した点、工事の方法、そして工事の経過が大変わかりやすく解説されていた。

なお、この平成の大改修に要した改築費用は国庫補助が半分、1割が熊本県、残りの4割が山鹿市の負担となっている。

3. 八千代座の特徴

ここでは八千代座の建築的特徴をкаいつまんで紹介する。

まずは工法である。この時代にはまだ珍しい洋式のトラス工法が取られている。これは三角形を応用するもので、柱を少なくすることができるため、客席から舞台が見やすいという利点がある。

内部に入るとまず目に付くのは鮮やかな色彩の天井広告である。現存するほかの芝居小屋には見られないものだそうで、いままで3パターンの絵が描かれてきた。今回の復原では、八千代座を設計した木村亀太郎氏自らがデザインしたという設立当初のデザインが採用されている。



八千代座の内部

大きなシャンデリアも特徴の一つである。第二次世界大戦中に金属供出のため取り外されたもので、60年ぶりに復活したものである。シャンデリアがあったことは言い伝えとして残っていたが、純和風の芝居小屋についてははずがない、という意見が大半だったそうだ。ところが古い写真が見つかり、実存が判明したという。しかし、不鮮明な写真のみではサイズも、ガス灯なのか電灯のかも判断が難しかったそうで、さまざまな角度から検証を行い、寸法やデザインを割り出した。そうするうちにシャンデリアの一部が奇跡的に発見された。復原されたシャンデリアにはそのうち使用できる部分を取り付けられているという。

1階客席は枡席になっていて、一区画に4人が座れたというが、一枡の大きさが95センチ×107センチだそうで、現代では4人が座るのはちょっと狭く、2人ずつ座るようにしているとのことである。枡席、棧敷席とも勾配がつけられおり、舞台が見やすいように設計されている。

芝居小屋の現在 八千代座レポート（3）

4. 運営

昭和55年に所有が八千代座組合から山鹿市に移され、その後は市が一括して経営を行っている。実際の運営は市の外郭団体である財団法人地域振興公社のスタッフが行う。見学客に対して案内係や芝居の準備をする裏方のスタッフもすべて地域振興公社の方々である。

八千代座の運営は見学と貸し館の二本立てである。メインは文化財の公開であり、見学者を増やすことに力を入れたいそうだが、改修が終わったばかりで注目度が高いためか、貸し館の予約が目白押しである。実は八千代座は冷暖房がない。そのため、夏の予約が少ない代わりに、秋の申し込みが大変多いという。週末はほとんど毎週のように催し物が行われているが、それには地元のカラオケサークルなども含まれている。また、2001年度は市の自主事業の催しが4本あって、ひっきりなしに何かが行われているという状況である。そのため見学が少なくならざるをえないことから、2002年度は市の催し物は1～2本に抑え、貸し館と見学を中心に運営を行っていくことにしている。

ちなみに見学料は大人500円、小中学生250円。以前は無料にしていたが、復元工事終了後から有料となった。新しく生まれ変わり、無料というのはいかがなものか、ということになったらしい。

さきほども少し触れたが、八千代座には空調がない。冷暖房により木材を痛めてしまう可能性があるという理由にも増して、冷暖房完備の施設では一般のホールとは何ら変わりがなくなってしまうという判断から設置は見送られた。今後少なくとも100年は改修工事が行われなと思われるので、空調も100年間は付くことはないだろう、とのことである。

入場者数は一般公開を開始した平成元年から大改修の始まる平成8年まで、ずっと右肩上がりが増えて続け、最も多い年には4万5,000人ほどだった。大改修後の今年も6万人を見込んでおり、ほぼ予定通りか、少し上回るほどになる見込みだという。もちろん、貸し館の際には見学ができないため、右肩上がりになる可能性は小さいだろう。

地域アイデンティティをシンボライズする空間、という位置づけにおいては、山鹿の全国的に有名な「山鹿灯籠祭り」の活用がある。これは女性だけによる「千人灯籠踊り」がメインとなるのだが、この踊りを八千代座の常設公演として見せてはどうか、という提案がよく出るそうだ。現在は観光協会の主催で毎年9・10月の毎週土曜日の夜に灯籠踊りなどを山鹿温泉の宿泊客向けに演じており、一晩で500人以上が訪れる日もあったほど好評だそうだ。これには温泉宿泊客は観覧無料という理由もあるだろう。そこで年間通して行いたい、との発想は当然なのだが、出演している保存会の女性は基本的に全員独身で、仕事を持っていたり、熊本市内のホテルなど他からの出演依頼もこなしたりと多忙のため、残念なことに通年での開催は難しい状況だという。



山鹿灯籠祭り
(山鹿市ホームページより)

5. 夢小蔵

八千代座の斜め向かいに併設されている「夢小蔵」は八千代座管理資料館である。もとは豊前街道沿いにあった商家の敷地内にあった土蔵を移設して資料館として再生した。建設されたのは八千代座よりも古く、明治20年である。開館したのは平成4年だが、資料館を訪れる人は少なかったので、八千代座の大改修後は両施設を併せた見学料を設定したそうだ。

「夢小蔵」には八千代座の芝居に使われていた200点以上もの小道具のほか、映写機、興行のチラシなどが展示されている。また、板東玉三郎が公演で着用した衣装も展示されている。



八千代座に併設している夢小蔵

[次へ](#) 



空間
通信
[トップ](#)

芝居小屋の現在 八千代座レポート（４）

6. 訪問記（１）

本当にこんな路地裏にあるのだろうか・・・と不思議な気分になるほど細い裏通りを通り、板塀の上でのんびりとくつろいでいる猫の横を過ぎていくと、突如大きな和風建築が現れた。これが八千代座・・・。当日はとてもいい天気、青空に鮮やかな色とりどりの旗と、まだ真新しさの残る白い壁が印象的である。軒下には赤い提灯がたくさんぶら下がり、両脇には酒樽が積み上げられ、芝居小屋にふさわしい賑やかな雰囲気である。団体の見学者が訪れていたのも、さらににぎわいを醸し出していた。

靴を脱いで上がり、受付の前を通って中に入ると、時間の経過に耐えてきた木の廊下や壁、柱、梁に囲まれ、一気にタイムスリップした気分である。廊下には当時使われていたという切符売り場があった。格子状のブースの中には八千代座のマークが入った座布団が置かれていて、本当にさっきまで人がいたかのようである。

客席に入ると、まず目に付くのが鮮やかな色の天井広告である。青地の天井が格子に区切られ、薬屋、味噌屋、旅館、文房具屋などさまざまな商店の広告が整然と円の中に描かれている。それらは明治期に主流だった錦絵風の引札（チラシ）がそのまま天井に描かれているようなデザインで、美人絵なども見られた。これは八千代座の設計を手がけた木村亀太郎氏自らがデザインしたものだそうだ。木村亀太郎氏はもともと長崎の諫早で測量技師をやっていた人で、設計には素人だったが、研究熱心で、各地の劇場を見学だけでなく、上海に行って建築の勉強に励んだと伝えられている。この天井広告は他の芝居小屋では類を見ないものだというところからも、木村亀太郎氏は研究熱心なだけでなくセンスもアイデアも優れていてタダ者ではないことが伺える。天井にはさらに、中央に鳳凰と思われる極彩色の2羽の鳥が描かれ、その下にシャンデリアが下がっていた。外装も内装も純和風なのに、輝くゴールドのシャンデリアが不思議にマッチしていて、まさに和洋折衷、明治期ならではの装飾である。

二層になった棧敷の下にもたくさんの赤い提灯が下がり、畳敷きの枱席と棧敷席はまさに芝居小屋という感じである。私がときどき足を運ぶ東京の歌舞伎座でも赤い提灯が気分を盛り上げてくれるのだが、畳敷きの枱席が醸し出している芝居小屋の雰囲気にはかなわないな、と思えるほど情緒がある。

1階では団体客を迎えるための準備が進んでおり、2階の棧敷席には人がどんどん入り始めていた。これから八千代座を紹介する映像を流すのだという。我々も一緒に見せてもらうことにして、準備の間に内部を



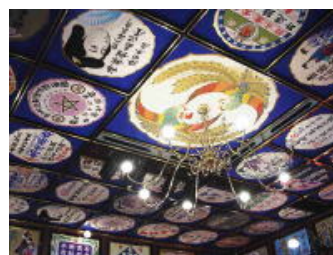
細い路地を抜けていく



青空に旗が映える



八千代座の正面



色鮮やかな天井広告とシャンデリア



団体のお客が続々と入ってくる

見学させていただくことにした。

花道を通り、舞台の袖から舞台裏へ進むと大道具の部屋があった。「無用者立入ヲ禁ズ 大道具」という当時の筆跡が残されていた。小道具部屋には現在使われている手桶や手ぬぐいなどが小道具がいろいろと置かれていた。その扉にも墨で何かが書いてある。当時の出演者の落書きで「大入満員」「日本一好い」「楽団ブルースターズ」などいろいろなことが書かれていた。



小道具部屋の扉には落書きが

当時の楽屋は、現在ではほとんど使われていないようで、見学ブースとして入れるようになっている。しかし玉三郎公演の際は実際に使っているとのことである。取り立てて特徴がない和室だが、小さめの窓は障子戸になっていて、部屋も障子で仕切られるようになっている。梁や柱など当時のものを使っており、傷が残っていたり、落書きがあつたり、物を引っかけるための釘が打つてあつたりと時代を忍ばせる跡がたくさん残っていた。



とってもシンプルな楽屋

[次へ](#) 



空間
通信
[トップ](#)

芝居小屋の現在 八千代座レポート（5）

7. 訪問記（2）

続いて「奈落」である。奈落とは舞台や花道の床下の総称で、ここに廻り舞台などの仕掛けがある。狭い階段を下りていく。地下の穴蔵という雰囲気、壁は石が積まれ、薄暗く、ひんやりしている。細い通路を抜けると広がっていて、廻り舞台の仕掛けがある。直径8.5mの廻り舞台は人力で回すもので、とても重く、大人でも一人ではとても回せないそうだ。レールと車輪はドイツ製で現在でも操業しているクルップ社のものである。このレールはトロッコを走らせるために作られた物を代用したのではないかとされているそうだ。



奈落の回り舞台の仕掛け

奈落は廻り舞台の仕掛けから花道の下を通って鳥家（とや）と呼ばれる1階栈敷の脇につながっている。途中、花道の下に「スッポン」の仕掛けがある。スッポンとは「人力操作のセリ」のことで、数人が役者を担ぎ上げ、花道に突如として現れたりする仕掛けである。忍術使いなどの登場の仕方によく見られるものである。設備上の仕掛けは、基本的には花道に穴があり、扉が付いているだけで特になにもないと言ってもいい。



場内の照明が落ちると提灯がきれい

鳥家に出ると喫煙室があった。ここはまだ整理されていない資料などの一時保管場所のようになっていて、我々が訪れたときは鬼瓦などがいくつも置かれていた。

そうしているうちに八千代座の紹介ビデオの上映が始まった。我々は2階の栈敷から見せていただいた。1階の枡席には暗がりの中でたくさんの人が座っているのが見えた。上映が終わると、今度ははっぴを着た担当の方が舞台上がり、補足説明を始めた。実際に舞台上げての説明も行われていた。



はっぴを着た担当の方が説明

我々は今度は裏の離れにあるトイレへ。有田焼の便器があると聞いて驚いた。タイルは白地に青の模様があり、便器そのものはうすいグリーンである。個室の扉は赤と黒の漆塗りで、かなりゴージャスなトイレである。当然ながら当時はくみ取り式なので、かなりにおいがきつかったそうだ。復原されたトイレは現在では使用されておらず、あくまでも見学用となっている。



有田焼の便器があるトイレ

夢小蔵

八千代座の管理資料館「夢小蔵」は2階建てで、明治20年に建てられた蔵とは思えない、きれいな外観である。ここは元は洋品店の倉庫だったそうだが、ご隠居の住居も兼ねていたそうで、中は倉庫というよりは住宅に近いつくりである。玄関のたたきの前は2階への階段があり、玄関の左には小さな和室がある。



催し物の掲示板に見入るお客

夢小蔵の1階には坂東玉三郎が第3回公演の「鐘ヶ岬」で着用した衣装が展示されているほか、以前に芝居で使われていた鎧、上棟祭の際に書かれた棟札が鎮座していた。2階には八千代座の構造模型、昭和初期に実際に使われていた映写機、小道具、広告チラシ、天井広告の原画、当時の写真、年表などが所狭しと並べられている。目を引いたのは映写機で、とても大きく、どっしりとしている。もう出番がないのかと思うと気の毒な気がする。

階段の回りには今まで開催された玉三郎公演のポスターが額装され、飾られていた。

夢小蔵の外には八千代座でこれから行われる催し物の日程を知らせる掲示板があり、チラシがたくさん貼られていた。公演と行事で予定はかなりぎっしり埋まっているのがわかる。

以前は夢小蔵に訪れる人が少なかったため、大改修後から八千代座の見学料と統一料金としたという。



資料館と、奥に置かれた映写機



豊富な資料が八千代座への興味をさらにかき立てる

まとめ

スクラップアンドビルドが基本の日本において、解体の危機を逃れ、改修し、活用されている八千代座は、本当に幸せな建物である。全国にあった芝居小屋は、人々の娯楽の多様化と、一等地に建てられていたという存続には不利な条件のためにその多くが壊され、他の建物になってしまっている例が多い。そのなかで、地域住民の熱意と、行政の熱心な取り組みが結実し、「芝居をしてこそ芝居小屋」の精神で活用していくというのは素晴らしいことである。山鹿が観光地であるために、観光資源として残したという側面も当然あるのだろうが、地域住民の「瓦一枚運動」は観光ビジネスを期待するのではなく、自分達の町にある文化遺構に誇りを持ち、後世に残したいという純粋な思いに端を発しているところが胸を打つ。

今回行われた大改修は100年に一度と言われている。またきっと100年後にも改修を行って、山鹿は「芝居町」であり続けて欲しいものである。

(編集部 池上)

 [八千代座TOPへ](#)



空間
通信
トップ